『就実論叢』第48号　抜刷
就実大学・就実短期大学　2019年２月28日　発行

保育者養成課程におけるピアノ指導

Piano teaching in the training course of the nursery school and the kindergarten teacher

秋　山　真理子　・　小　川　則　子
秋　山　康　子　・　藤　澤　温　子

就実論叢　第48号（2018），pp.119-130

保育者養成課程におけるピアノ指導

Piano teaching in the training course of the nursery school
and the kindergarten teacher

秋　山　真理子（幼児教育学科）
AKIYAMA Mariko
小　川　則　子（幼児教育学科）
OGAWA Noriko
秋　山　康　子（幼児教育学科非常勤講師）
AKIYAMA Yasuko
藤　澤　温　子（幼児教育学科非常勤講師）
FUJISAWA Haruko

キーワード：ピアノ、個別指導、コードネーム、弾き歌い

１．はじめに

保育者に必要とされる専門性の一つとしてピアノ演奏の能力があげられる。この能力は、子どもの感性を育て、日々の音楽活動を伴う表現活動を豊かにするために求められる。

保育者養成課程においては、長年、器楽（特にピアノを中心とした）の授業は、資格を取得するための重要な必修科目として、また、就職試験において、ほぼすべての園の試験内容に含まれるという現状からも､重要な科目に位置づけられている。私たちの学科においても、それは同様であり、過去には入学試験科目の一つにピアノ演奏が課せられたこともあり、現在も入学前セミナー等で入学予定者にピアノ演奏をしてもらい、入学後にピアノ演奏技能をしっかり身に付けることの重要性を喚起している。そのためもあってか、保育者になりたいがピアノの経験が少なく、ピアノの授業に不安を感じながら入学してくる学生も多い。

本学科の、音楽（器楽）という名称のピアノの授業は、５－６名程度のグループに分かれ、個別指導を中心とした指導を行っている。本学科のこの授業形態を志望理由として挙げて入学する学生も多く、授業評価アンケートでの高い評価からも、この形態が学生に支持されていると判断される。他大学の養成課程では、個別指導の授業形態が無くなりつつあるという現状を踏まえながら、本論文では、この授業の指導記録を振り返り、今後のより良いピアノ指導につなげたいと考える。

２．学生の現状

本学科では、入学生（約100名）をグレード別ではなく、学籍番号順に５－６名のグループに分けてそれぞれを教員が分担する方法をとっている。以前と大きく異なってきているのは、近年、ピアノ人口の減少に比例して、ピアノを全く弾いたことがない未経験者や、初心者に近い者、エレクトーン（２段鍵盤）のみの経験者の増加である。また、ピアノを含む鍵盤楽器を持っていないという学生も多く見られる。しかし、以前と同様に、ソナチネ以上の曲を弾けるというピアノ経験の豊かな学生も少なからずいる。学籍番号順にグループ分けをすることにより、グループの中には、上級者から初心者まで、幅広い様々なレベルの学生が存在することになる。

授業内容は、基本はシラバスに沿う形であるが、指導は個々の学生のレベルに合わせて各教員に任されている。始めの数回の授業を行った後に、学生の個々のピアノ演奏の技能レベルを、表１のレベル表を参考に、ＡＢＣＤの４段階に分ける。担当教員は、学生のレベルが、ＡＢＣＤのどの段階にあるのかを把握した上で、各々の学生のレベルに合わせて曲を選び指導方法を工夫する。

表１　ピアノ演奏の技能レベル表

A	ソナチネアルバム程度以上
	（様々な曲の音楽的な表現が可能である）
B	ブルグミュラー25の練習曲程度
	（両手で弾くことができ、音楽的な表現もある程度可能である）
C	バイエル教則本の後半程度
	（ヘ音記号も含めて両手で何とか弾ける）
D	未経験者又はバイエル教則本の前半程度
	（ト音記号の楽譜は読めるが、ヘ音記号に慣れておらず、両手で弾くのが難しい）

３．指導の要点

（１）各々のレベルに合わせた音楽の基礎の導入

小・中・高の学校教育の音楽の中で以前から教員を悩ませてきた、ピアノ経験者と未経験者間の音楽の様々な点におけるレベルの差が、短大ではますます大きくなっている。高校時代に音楽を選択科目に選ばなかった学生にとっては益々ハードルの高いものになっているので、まず、経験の少ない学生に対して、個別に丁寧な指導を行う。

（２）コードネームの指導について

子どもの歌の多くが、ハ・ヘ・ト・ニ長調で作られているので、これらの調の音階の理解を促すとともに、コードネーム指導を行う。まず、これらの調の主要三和音の習得、次によく使用されるセブンスコード、可能であれば、マイナーコードも同時に習得させる。この時

に、基本形と転回形についても教えるが、同じコードでも調によっては用いる音形が異なることについては、この後の授業の中で、実際に数多くの曲を演習させ個別に指導することによって理解させていく。

（3）コードネーム練習曲集の活用

本学科では、毎年実習後の学生からの聞き取り調査を行い、園で使われる曲等を参考にコードネーム練習曲集を作成し、学生のサブテキストとして使用している。この中には、ハ・ヘ・ト・ニの各長調で作られた子どもの歌約70曲を収録し、反復練習によるコードネーム演奏の習得に役立てている。コードネーム演奏の習得は、音楽の構成全体を把握する上で大きな役割りを果たすと考えられ、初心者でも弾き歌いや初見演奏を可能とするため、習得するように指導している。以下に、コードネーム練習曲集の内容を示す。

【コードネーム練習曲集】

1　音階と音名・基本的なコード

2　４つの調（ハ・ヘ・ト・ニ）でのコード伴奏

ぶんぶんぶん ／ メリーさんのひつじ ／ きらきらぼし ／ ちょうちょう ／ チューリップ

3　メロディーに合うコードは

ハ長調　こぎつね ／ おもいでのアルバム ／ さよならのうた ／ おべんとう ／ むすんでひらいて ／ たきび ／ 聖夜（きよしこの夜）

ヘ長調　ゆき ／ まつぼっくり ／ おほしさま

ト長調　動物園へ行こう ／ 線路は続くよどこまでも ／ 列車ははしる

ニ長調　あくしゅでこんにちは ／ おへそ ／ まめまき ／ あめふりくまのこ

4　コード伴奏で弾き歌い

ハ長調　こいのぼり ／ アイアイ ／ せんせいとおともだち ／ ことりのうた ／ とんぼのめがね ／ 手をたたきましょう ／ アイスクリームのうた

ヘ長調　たなばたさま ／ ありさんのおはなし ／ ミッキーマウスマーチ ／ 南の島のハメハメハ大王 ／ ぞうさん ／ かわいいかくれんぼ

ト長調　ハッピー・バースディ・トゥ・ユー ／ 水あそび ／ 山の音楽家 ／ うみ ／ ふしぎなポケット ／ 小さな世界

ニ長調　めだかの学校 ／ しゃぼんだま ／ かたつむり ／ とけいのうた

5　名曲をコード伴奏で

空も飛べるはず ／ 少年時代 ／ 星に願いを

6　応用編（色々な曲に挑戦）

ハ長調　ジグザグおさんぽ／みんなともだち／宇宙船のうた／あめふり／あしたははれる／にじのむこうに／ぼくのミックスジュース／とんでったバナナ／ガリガリかき氷／運動会のうた／おじいちゃんのおとし／ドキドキドン！一年生／そうだったらいいのにな

ヘ長調　たのしいね

ト長調　さよならぼくたちのほいくえん／どんな色がすき／にじ／オバケなんてないさ

ハ短調　うれしいひな祭り

7　さまざまな音楽記号

（4）子どもの歌の弾き歌い指導について

音楽（器楽）の授業では、子どもの歌の弾き歌いの指導も行う。個人レッスンのメリットを活かして、歌う姿勢や歌詞の意味の理解、ピアノ伴奏と歌声とのバランスなどを指導していく。弾き歌いは、数多くの曲の反復練習や現場を想定した練習によって慣れていくことが大切なので、学生のレベルに応じてコードネーム練習曲集と市販の楽譜を使い分けている。

（5）ピアノ曲演奏の意義とペダリング指導の必要性

子どもの歌だけでなく、ピアノ曲を弾くことは、より複雑で細やかに楽譜に書かれているさまざまな記号や音符を演奏によって音楽的に表情豊かに表現していくことであり、学生の音楽的成長にとって不可欠であるとの認識から、学生には弾き歌いと並行してピアノ曲を弾くことを課している。個々の進度に合った曲を担当教員と学生が、クラシックの楽曲、ポピュラー、ジャズ、映画音楽など幅広いジャンルの中から選び完成させていく。若い学生にとって弾ける弾けないにかかわらず、聞き覚えのある楽曲の数は膨大であり、その中の曲を自ら演奏するという体験は、演奏技術を向上させ、より豊かな表現力を身に付けていくことにつながり、子どもの歌の弾き歌いにも良い影響を及ぼす。

また、ピアノ曲を指導する際に、早い段階でペダルの使用法を知らせることも重要である。上手なペダリングによって、楽曲は豊かになり輝きを増すことを理解させる。

4．指導記録

音楽（器楽）の授業は、必修・選択合わせて２年間継続して開講されている。

４期に分けた授業の指導内容と到達目標を含む概要は以下のとおりである。このような授業計画の下に、各教員が、学生の個々のレベルに合わせた指導を行っている。

・１年前期：ピアノ演奏の基礎とコードネームの理解・コード伴奏の基礎を習得する。
・１年後期：ピアノ演奏能力の向上と子どもの歌の弾き歌いの技術を習得する。
・２年前期：実習（７月上旬～10月上旬実施）に備え、弾き歌いのレパートリーを増やす。
・２年後期：保育現場での活動（子どもへの歌い始めの合図や子どもの動きに合わせたピアノ演奏など）を意識した、伴奏・弾き歌い等の能力向上を図る。

次に、**表１**で示した、授業開始時のピアノ演奏技能レベル表から、それぞれのレベルの学生５名（A1，B1，C1，D1，D２）を選び、２年間にわたって、どのように指導し、弱点を克服し、ピアノ演奏の技能を習得させていったかを示す。

１）Ａ１について

Ａ１は、５歳から大学入学までピアノレッスンを受け、《小犬のワルツ》《ノクターン

op.9-2》を始め、バッハやベートーヴェンのソナタなどの作品も弾いてきた学生である。指はよく動き譜読みも早く正確という長所を持ちながらも、タッチが弱いために強弱がつけられず、演奏が全体に一本調子で表現力に欠けるという弱点があった。

１年前期のコード学習では、Ａ１はコード伴奏の習得は早く、コードでも楽譜通りの伴奏でも問題なく弾けていたが、音程を正確に歌うことが苦手であったために、歌うことに自信が持てず、囁くような弱い声になってしまっていた。そのようなＡ１に対しては、次のような順序で指導していった。右手の旋律をよく聴いて同じ高さの声を出す練習を繰り返す → 歌の始まりの音を正確に歌う → 数小節ずつに分けて反復練習を行う。このような指導を多くの曲で繰り返すことにより、後期には、ほぼ正しい音程を保って歌えるようになり、弾き歌いが苦手ではなくなっていった。

１年前期のピアノ曲では、曲ごとに場面や情景を思い浮かべ、その曲から連想される絵や色をイメージし、音楽に沿ってストーリーを考えてみるなどの様々な角度からのアドバイスを丁寧に行った。後期に、モーツァルトのソナタや《ノクターン遺作》などの多彩な曲に取り組む中で、徐々にＡ１の想像力が引き出され、タッチに変化が生まれ、次第に細やかな表情や深みのある音を出すことが可能となっていった。

２年前期の弾き歌いでは、実習前に多くの曲を準備することができ、保育園・幼稚園実習後の後期には、子どもに歌を指導することや弾き歌いの重要性を自覚するようになり、今まで以上に積極的に弾き歌いに取り組む姿勢が見られた。《バスごっこ》《アイスクリームのうた》など10曲を課題としたが、長年の歌うことに対しての苦手意識が解消されたことで、自信をもって弾き歌いができた。

２年のピアノ曲は、《栄光の架橋》を課題とした。上級者用の華やかな編曲で、幅広い音域や複雑な和音、細やかな音の動き等のかなり技術的に難しい部分もあったが、１年次からの継続的な指導によって入学当初の乏しい表現力や弱い打鍵を克服し、今までにないダイナミックで表情豊かな演奏となり、本人も満足して最後を締めくくることができた。

Ａ１は、苦手であった歌唱が弾き歌いの指導の中で克服でき、また、得意なピアノ演奏においても、授業での的確な弱点の指摘と適切なアドバイスを受けることによって、あらたな技能を獲得し、より表情豊かな演奏をすることができるようになった。

２）Ｂ１について

Ｂ１は、ピアノ経験はないが、エレクトーンを少し習っていたので、音楽の基礎知識や読譜力はあった。

１年前期のコードネーム学習では、Ｂ１はエレクトーン経験者のため、よく理解していたが、エレクトーンでは足鍵盤と左手で三和音を弾くのに対し、ピアノでは左手のみで三和音を弾くという違いがあった。その違いを毎回の授業で具体的に細かく指導し、前期の終わりには、ピアノでのコード伴奏による弾き歌いができるようになり、後期には、コードネーム

練習曲集を用いて、分散和音や様々な伴奏型にアレンジすることができるよう指導した。

１年前期のピアノ指導では、エレクトーンに慣れているＢ１は手や指に負担を感じたようであった。これは、エレクトーンが二段鍵盤の構造で鍵盤を軽く押えるだけで音が出るのに対し、ピアノでは鍵盤が同列に並びしっかり押さえないと音が出ない、エレクトーンでは右足ペダルを踏んで音の強弱をつけるのに対し、ピアノでは指の打鍵の強さで音の強弱をつけるという２つの楽器の特性の違いのためかと思われた。Ｂ１に対しては、まず、ピアノの鍵盤に慣れることに重点を置いた指導から始めた。ピアノの強い打鍵を身に付けるために《闘牛士の歌》等を課題として毎回深く強いタッチを指導していった。次第に打鍵力が増し、明確な音で弾けるようになった。後期には《タンゴリフィック》を用いてピアノの強弱の表現方法やペダルの使い方も指導した。

２年の弾き歌いでは、原曲の楽譜通りの伴奏でも弾き歌いができるように《ドキドキドン一年生》《どんな色がすき》などの曲に取り組んだ。レガートペダルを用いたり、声とピアノのバランスを考えるよう指導し、表情豊かな演奏ができるようになった。

２年のピアノ曲では、前期にブルグミュラーの曲等を課題として引き続きペダルの指導を行った。タッチと同時に踏むアクセントペダルはすぐにできるが、レガートペダルは踏みかえのタイミングが難しい。しかし上手にペダルを使うことによって、豊かな響きのある細やかな表現が可能となることを実感させた。後期の《Summer》では、細かい動きや重音、リズムの変化なども正確に弾きこなし、強く確実な打鍵、表情豊かな表現ができ、入学時に比べ目覚ましい上達ぶりであった。

エレクトーン経験者の学生に対しては、ピアノとの違いを具体的に示し、ピアノを弾く上での弱点を指摘し指導することが必要である。両手で弾くことに困難はないので、適切な指摘と指導によってピアノという楽器に早く慣れることができる。また入学時からコードを理解している点は大きな強みであり、Ｂ１は、コード学習時には手本を見せる等、他学生のコード理解への手助けも行い、その自信が難しいアレンジのコード伴奏での弾き歌いにも意欲的に取り組むなどの相乗効果を生んだ。

３）Ｃ１について

Ｃ１は、バイエルの後半を弾いてはいたが、譜読みが遅く、弾き直しも多く、音の強弱などもつけることができないなど、弾くことに自信がないために、短大での器楽の授業についていけるか大変不安を感じていた。

１年前期のコード学習では、コードネーム練習曲集を用い《ちょうちょう》などの平易な曲から始め、簡単なコード伴奏を付けていくという毎回の練習の積み重ねで、後期には徐々に慣れていった。

１年のピアノ曲では、前期は、バイエル後半の曲で指の基本練習や譜読みに慣れた後に、３拍子の短く簡易な曲でペダルの使い方を指導した。まず左手だけで演奏し、次に左手に合

わせてペダルを踏み、十分に慣れてから右手を加えていく。ペダルを踏むタイミングは慣れるのに時間がかかるが、マンツーマンの具体的な指導でＣ１は一週間でタイミングを掴んだ。ペダルを使うことで響きに奥行きが出て滑らかな演奏が可能となるため、上達した気分になり、少しずつピアノを弾くことに自信がついてきた。後期では、まず、初級の連弾曲《星に願いを》に取り組ませた。始めは二人で息を合わせることが難しかったが、お互いの音をよく聴き合うことを繰り返し指導することで、次第に合わせられるようになった。連弾は、一人で演奏するよりもダイナミックな表現が可能となり、アンサンブルの楽しさと達成感を味わえ、良い伴奏や意欲に繋がっていく。また、《つむぎうた》などの、難しいテクニックは必要とせず読譜もしやすいが、転調や曲調の変化があり表現や様々なテクニックを勉強できるピアノ曲に取り組んだ。多くの曲に親しむうちに、弱点であった弾き直すくせが減ってきた。

２年の弾き歌いでは、実習前までには、《ゆうやけこやけ》《とんでったバナナ》などをコード伴奏で弾き歌いすることが可能となっていた。後期には、レパートリーを多く持つことを目的とし、各自に「季節の歌」「動物の歌」などのテーマを設定させた。Ｃ１は、「昔から歌われている定番曲」をテーマとし、《山の音楽家》《あめふりくまのこ》など10曲を完成させた。コード伴奏の徹底した指導によって、このような様々な子どもの歌の弾き歌いにも対応できるようになった。

２年のピアノ曲では、《花は咲く》を課題曲とした。２年間、バラエティに富んだ数多くのピアノ曲に取り組ませるうちに、弾くことに自信が持てるようになり、技術的にも表現の面でも成長していき、落ち着いて、弾き直しをすることもなく、強弱の付いた表情豊かな演奏をすることができた。

４）Ｄ１について

Ｄ１は、入学までに鍵盤楽器の経験は全くなく、楽譜を読めなかったが、高校時代に趣味でギターを弾いた経験があり、コードについては多少理解していた。

１年前期のコード学習では、まず楽譜の音がピアノの鍵盤のどの位置にあたるのかを理解させるところから始めた。また、コードネーム練習曲集を用いて、音階を片手、両手と反復練習し、子どもの歌をコード伴奏で弾けることを目標に指導した。

１年のピアノ曲では、左手がコード伴奏になっている《ライオンの大行進》を課題とした。堂々とゆったりとした曲でありながら、左手に１オクターブの素早い動きを伴うが、がっしりした手で打鍵すると力強いピアノの響きが出て、題名通りの雄大さが感じられる演奏ができた。細かく速い動きが苦手であったＤ１には、右手のやさしい《キラキラ星》などの曲を選び、ゆっくりな動きから始めて徐々にテンポを上げていき、次には、ゆれる・スキップなどの動きを伴うリズムの変化に合わせて右手の指をスムーズに動かすことや、左手の伴奏型を変化させて弾くなどの細やかな動きができるように指導した。Ｄ１には、曲数を増やすよ

りも、１曲の中での多様な弾き方の指導を２年前期まで続けていった。

弾き歌いの指導は、ピアノに少し慣れた２年前期になってから始めた。ピアノ伴奏部分は弾けるようになるが、歌うとなると元気な曲は得意だが、優しく可愛らしい歌は苦手であった。Ｄ１は、男子学生で、楽譜に書いてある音と自分の出す１オクターブ低い声とが合わず歌いにくいようなので、裏声（ファルセット）や、無理のない柔らかい声で歌うように指導した。子どもの歌は、高い声域（ソプラノ）で書かれている場合が多く、男性への適切な指導は、今後の課題である。後期には弾き歌いの仕上げとして《宇宙船のうた》にコード伴奏で取り組んだ。本人に合う曲だったので熱心に取り組み、努力した跡が感じられた。曲の中程の無伴奏で地声で元気よく合図する部分も、次のピアノ伴奏が付いた歌の部分へと途切れることなくつないで上手に弾き歌いすることができた。

２年後期のピアノ曲は《主よ、人の望みの喜びよ》を選んだ。バッハのようなシンプルな構成の曲は、初心者には意外に取り組みやすいようだった。簡易編曲版であったが、左手を重厚に響かせ、右手の旋律を美しく弾くことができた。

ピアノ経験のない学生でも、ギター経験があれば、コード理解も早いと思われるので、初期段階でコードを理解し身に付ける徹底した指導は大変効果的である。その結果、弾き歌いができるようになると、ピアノ曲にも意欲的に取り組むことができる。

５）Ｄ２について

Ｄ２は、楽器経験は全く無く、ト音記号での音符が何とか読める程度であった。

１年前期のコード学習では、コードネーム練習曲集を用いて、ハ・ヘ・ト・ニの各長調における主要三和音について丁寧に説明し、《メリーさんのひつじ》などの簡単な曲については、４つの調のコード伴奏て弾けるよう指導した。後期には弾き歌いも指導したが、本人が歌うことは好きで弾きながら歌うことへの抵抗感が少なかったために、ピアノを弾くのに慣れてくると、《ぼくのミックスジュース》のような軽快なリズムの曲を始め、多くの曲の弾き歌いができるようになった。

１年前期のピアノ曲では、バイエルを用い、両手で同じ音の動きで鍵盤を押さえることから始め、読譜や正しい指使いで弾くことを指導した。グループ内にピアノの得意な学生が多いことに刺激を受け、毎回の授業では、不明な点を一つ一つ熱心に質問してきた。その都度リズムのとり方や音符の長さの数え方などを丁寧に指導した。このような指導の下での上達は目覚ましく、ヘ音記号の読譜や右手の指のスムーズな動きもすぐにマスターし、前期の終わりには、右手の動きの複雑な《主よ人の望みの喜びよ》も簡易楽譜で弾くことができた。後期には、多様なリズムや滑らかに弾く技法を指導し、初級版のディズニー映画の主題歌《レット・イット・ゴー》に取り組み、ピアノを弾く楽しさを実感できるようになった。

２年前期の弾き歌いは、実習を意識して季節の歌を重点的にとりあげ、簡易伴奏を用いて数多くに取り組ませた。ピアノの上達にともなって弾き歌いのレパートリーも増え、表現力

や声量も増していき、後期には、《にじ》や《さよならぼくたちのほいくえん》などの少し難しい曲にも取り組み、歌とピアノのバランスを考えて弾き歌いができるまでになった。

２年のピアノ曲では、《戦場のメリークリスマス》や《情熱大陸》などの曲で、一層の技術と表現力を身に付けることを目指し、また、滑らかに弾くためのレガートペダルの指導も行った。平易なアレンジ版であってもリズムなどはかなり難しい部分も多かったが、数小節単位で細かく区切り少しずつ指導していく方法をとり、最後まで正確に仕上げ、表情豊かに演奏することができた。

Ｄ２のような楽器の未経験の学生には、スタートの段階での能力に応じた丁寧かつ具体的な指導と、少しの上達でも褒めて励まし自信をつけさせるきめ細かなサポートが大変重要である。このようにして少しずつピアノに慣れてくると、上達への純粋な喜びや充実感が、意欲的な取り組みに繋がり、ピアノ演奏も弾き歌いも共に全くの未経験者からのスタートとは思えないほどの上達が可能となったのである。

５．指導の要点の検証

上述の５名の学生の指導記録から、３.指導の要点で述べた項目が、どのように実際の指導に活かされ、効果があったのかについて検証する。

（１）各々のレベルに合わせた音楽の基礎の導入

音楽の基礎の理解は、各々の学生の今までの音楽歴によって大きく差が表れるところである。しかしながら、音楽記号や音符の読み方や指使い等の音楽の基礎の部分の多くは、実際には、毎回の授業での楽譜（特にピアノ曲）に接することによって学んでいくのである。特に、初級レベルのピアノ曲の中には、多くの基礎的音楽記号等が含まれており、学生が曲を学習するときに指導者がその都度丁寧に個々に伝えていくことで、自然に深く理解できるようになっていく。音楽記号を始めとする基礎的な理解は、子どもの歌を始めとする幼児音楽を伝える保育者には大変重要である。

（２）コードネーム演奏の習得

初心者の保育学生にとっては、左手と右手を同時に動かすこと自体が大変難しく、短期間に保育学生に求められる子どもの歌を弾き歌いする能力の習得は困難を伴う。コード伴奏はこの困難を軽減するのに大変大きな役割を果たしており、コード伴奏の習得によってピアノを弾くことに抵抗感がなくなり多くの弾き歌いのレパートリーを持つことができる。

また、コードネームの理解は、曲の構造を把握する助けとなり、ピアノを得意とする学生にとっては、さまざまなリズムにアレンジして弾いたり子どもの動きに合わせて展開させていったり、多様なジャンルの音楽の演奏も可能となる。保育現場で子どもが歌を歌うという行為は、子どもの成長発達や情操教育の面、また、多くの歌に接することで広い世界に興味

や関心が向くきっかけになる点でも欠かせないものであり、コード伴奏は現場の保育者にとっても、大きな助けになると考えられる。

（3）弾き歌いの指導

弾き歌いが上手にできることは、保育者としての必須条件である。ピアノの演奏と歌唱のバランスがとれて初めて良い弾き歌いと言えるが、ピアノと歌唱の技能の高さが一致していない学生も多い。たとえば、歌は上手であるのにピアノの技能が追い付かず邪魔をしてしまう、逆に、ピアノは上手であるのに、高い声が出ない、音程を正確に歌えない、ほとんど声が出ていないなどの状況が見られる。自分の声に自信が持てないまま保育者になれば、保育現場で子どもに楽しく歌を教えることは難しい。

このように、弾き歌いの場でも、ピアノの苦手な学生に対しては、それぞれのレベルに応じた伴奏型を用いて弾けるよう指導し、歌唱に問題があったり、人前で歌うことに抵抗がある学生に対しては、個別指導によってこそ徐々に改善していくことが可能なのである。

（4）ピアノ曲演奏を指導に取り入れることの意義と効果

現在、多くの保育者養成機関が、器楽の授業では弾き歌いの指導が主であり、ピアノ曲の指導は少なくなっているようである。

しかしながら、ピアノ曲には、子どもの歌には出てこない強弱やテンポの大きな変化、複雑なリズムやハーモニー、ダイナミックな構造などがある。クラシック以外にも、ポピュラー、ジャズ、映画音楽等、多くの有名な曲の初級・中級・上級用に様々にアレンジされた楽譜が出版されているので、学生のレベルに合ったこのようなピアノ曲を指導に加えることで、練習に取り組む姿勢が見違えるほど意欲的になる。また、クラシック曲のみを弾いていたピアノの得意な学生にとっても、ポピュラー音楽を体験することは、新しい刺激となり、表現の幅を広げていくことに繋がっていくと考えられる。

ペダリングについても、アクセントペダル、レガートペダルの両方を習得しておくと、表現が豊かになり、ピアノ曲はもちろんのこと、弾き歌いでペダルを用いた方が効果的な場合に、自由に取り入れることが可能となる。

また、１年次に合同発表会の場を設けているが、時間をかけて一つの曲を完成させる喜びや達成感を味わうことができ、音楽的・技術的にも大きな成長が見られる。人前で弾くことは緊張も伴うが貴重な経験となり、他の学生の演奏を聴くことは大いなる刺激となって次の意欲に繋がる。

このように、ピアノ曲の指導を並行して行うことによって、弾き歌いにおいても、音楽的にも技術的にも大きな成長が見られるのである。

（５）進度調査結果と今後の指導の方向

2013年から2018年の６年間にわたり、２.学生の現状の項で述べた、入学時に行っているのと同じ基準の進度調査（Ａ：ソナチネアルバム程度以上　Ｂ：ブルグミュラー25の練習曲程度　Ｃ：バイエル教則本の後半程度　Ｄ：未経験者又はバイエル教則本の前半程度）を２年後の卒業時にも学生（約100名）に実施し、結果を**図１**で表した。

Ｃ・Ｄレベルの学生の割合は、入学時に比べ卒業時には激減し、それに対して、Ａ・Ｂレベルの学生の割合は、入学時に比べ卒業時には増加している。２年間でピアノ演奏の技能が全体にレベルアップしていることが、この数値に表れていると考えられる。

保育者養成課程においては、個々に多様な技能が求められている。今回の調査結果が意味するものは、音楽（器楽）の授業において、レベルや経験の異なる学生に保育現場で使いこなせるまでのレベルの技能を身に付けさせるためには、多くの時間をきめ細かな個別指導に費やすことが是非とも必要であり、同時にそれが学生の意欲を喚起し、スキルアップのための最も効果的な方法ではないかということである。

2018年度の保育士・幼稚園教諭の公務員採用試験において、岡山県内では、音楽・図画工作・幼児体育・模擬保育のような実技系統のものを重視する自治体が増えており、きめ細かな個別指導によって、学生に保育現場で通用するレベルの技能を身に付けさせることは急務となっている。

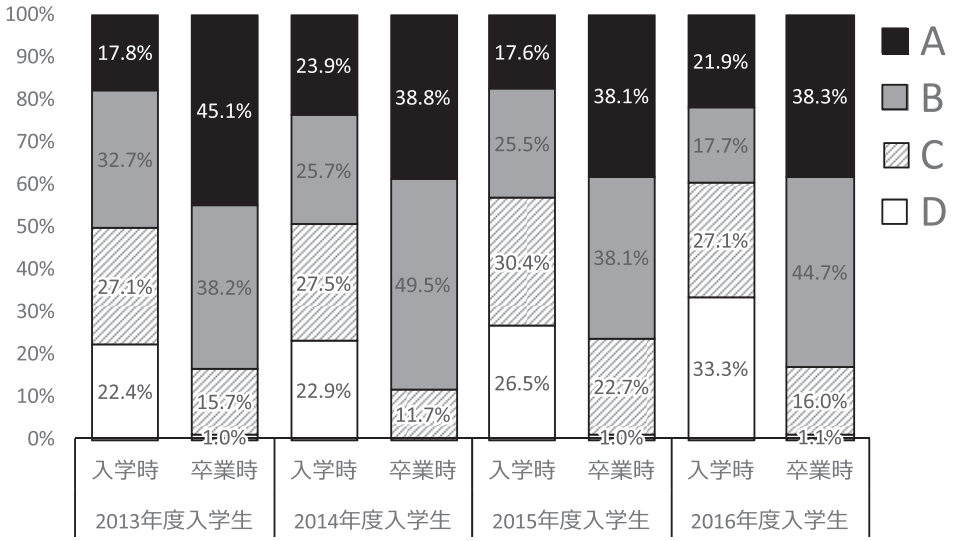

図１　進度調査の比較表

６．おわりに

今回、器楽の指導教員４名での研究を進める中で、ともすれば閉鎖的になりがちな個々の教員の指導内容・指導方法を開示し、お互いに疑問を投げかけることにより、多くの点で教

員間の指導内容のコンセンサスを得ることができたことは大変有益であった。他の教員の指導内容を参考に、自身の指導内容を客観的に見直し改善する良い機会にもなった。

保育者養成課程におけるピアノ指導は、より良い保育者を育てる目的のもとに行われるものであり、単に音楽の技術指導だけにとどまるものではない。今回の研究で個別指導の重要性をあらためて認識しつつ、今後もより良い学生のピアノ指導をめざし深めていきたい。

＊本稿は、日本乳幼児教育学会 第28回大会（2018年12月８日９日 於：岡山コンベンションセンター）における発表内容に、加筆・修正を行ったものである。